

# Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.7 July 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

7

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
「元初まりの話」の読まれ方・その4  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (32)  
先住民村落における宗教文化の変容  
／山西 弘朗 ..... 2
- ・ 教内の福祉の歴史 (4)  
(続) 歴史および歴史学について  
／松原 浩一郎 ..... 3
- ・ 天理図書館外史 (4)  
天理図書館の文化的価値—文化資源活用の一つの取り組み①  
／三濱 靖和 ..... 4
- ・ 日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (10)  
香港占領地総督部の設置と占領統治方針  
／山本 和行 ..... 5
- ・ ブラジルの宗教的風景 (14)  
アンテペラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動②  
／中西 光一 ..... 6
- ・ 2026 年度公開教学講座：布教伝道と伝道学 (1)  
第1講：伝道学入門—丸川仁夫『伝道学概論』から考える  
／堀内 みどり ..... 7
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 8  
追悼 福井陽一先生／2026 年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### 「元初まりの話」の読まれ方・その4

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

「元の理」を何度か読んでみるが、結局分からない。しかし、読むほどに次第に好きになってきて、「なるほど」と思うことが出てくる。逆に、簡単に我々の頭で分かったのなら、それは「元の理」とは言えないだろう。分かろうと思うのであれば、何度でも読み返すしかなく、頭の中ではなく、腹の中に入れていけな。 「元の理 (元初まりの話)」<sup>(1)</sup> についての河合隼雄の見解である。

彼が「元初まりの話」の中でまず取り上げるのが、「メザルー一匹」である。この創造説話では、せっかく誕生した人間が全て出直してしまい、その後の八千八度の生まれ変わりを経て、最後にめざるが一匹だけ残るが、それは何を暗示しているのか。それが分かれば、それぞれの人生で自分にとっての「メザルー一匹」が何であるかが分かる時が来る——河合はそう示唆する。

彼はまた、このサルの意味を色々と思いつかべるのは良いものの、これだと決めつけることのないようにすべきだと釘を刺す。例えば、このサルは孤独を意味していて、人間はどこかで孤独になる存在であり、孤独になったところから話は始まるのだ——そのように決めつけたとしたら、浅薄としか言いようがないと断言する。彼にとって「元初まりの話」は、イメージを無限に膨らませるような態度で接するべきテキストであり、読む度に異なる答えが立ち現れるようなテキストなのだ。

天理教の教会長が悩みの相談を受け、「元初まりの話」に照らして答えが見える時があるかもしれない。だが、これが絶対に正しい道だと思いつくのが最も危険なことだと河合は強く戒める。それはその場限りの答えであって、相談に来る人ごとに話を聞いて、照らし合わせなければならぬと言うのである。彼は臨床の現場において実際に同じような姿勢でクライアントと向き合ってきたに違いない。臨床家ならではの読みと言える。

河合によれば、「元初まりの話」の示す答えは、物理学の法則のような、いつでもどこでも当てはまる普遍的なものではない。そのテキストと対峙する中で彼の言う“スパーク”が走ることがあり、それはその人なりに見出す“輝き”のようなものである。その輝きは人によって異なり、その人でさえもその時にしか得られないような極めて個別な答えなのだ。そうした輝きを普遍的な答えと見なさない態度で「元初まりの話」と向き合うことが大切だと彼は言う。

ところで、「元初まりの話」のもととなった「泥海古記」は、「こふき」本として諸本が残されている。教祖の高弟らがそれぞれ記したものであるが、教祖はいずれの「こふき」本についても良しとされなかったと伝えられている。その理由については、様々な解釈があるが、河合の読みは興味深い。教祖には、「元初まりの話」は明確に記すことのできないものだという確信があったのではないかと考えるのである。

「泥海古記」は朱を入れて書き直す類のものではなく、人により、その時々により、それぞれに見えてくるものであるからこそ、良し悪しも言われなければ、廃棄せよとも言われなかったのではないかと彼は推測する。「元初まりの話」は、その時々でその人なりの答えが現れてくる開かれたテキストである。そのような性質のテキストである以上、いずれの「こふき」本も良しとしなかった教祖の判断は、むしろ必然だったということになる。「元初まりの話」の本質を深く見抜いた読みと言えるだろう。

[註]

(1) 河合隼雄 (1987) 「深層心理と『元の理』」『G-TEN』第20号、55～74頁。(『講座「元の理」の世界1:「元の理」の人間学』に再録)。河合の論考における「元の理」は狭義の意味、すなわち「元初まりの話」を指している。